

〔重修本草綱目啓蒙三十五〕寅類怪類 猩猩〇中

増本邦痘瘡ノ家ニ、猩猩ノ形ヲ作りテ祭ル、痘瘡ハ色紅ナランコトヲ欲ス、猩猩ハ酒ヲ好デ酒ハ一身ヲ順ラシ、紅色ナラシムル故ナリ、往昔黃蘗山萬福寺ノ開山隱元禪師、此猩猩ヲ祭ラシメ、痘瘡ヲ輕クスル禁呪ヲセシコトアリ、故ニ禪師入定ノ後モ祀ル者アリテ、好事ノ者、唐土ノ不倒翁ニ擬シテ、禪師ノ形ヲ作り爲シテ、相共ニ祭ラシム、今ヲキアガリコボシト云人形是ナリ、老翁不倒堅固ノ形ヲ摸シ、小兒ニ祝シテ玩ビノ小人形トスル者ニシテ、今ニ至テ、痘瘡ノ家ゴトニ、猩猩トヲキアガリコボシトヲ祝物トス、因ミニ云、近年攝州ノ一比丘、痘瘡ノ呪ヲナスニ、小キ箕ノ裏ニ呪文ヲ書シ與ヘ、コレヲ祭ラシム、若痘瘡キ時ハ、即此箕ヲ搔ク、若シ痛ム時ハ、此箕ヲ摩スルト云、近比痘瘡家ニ、猩猩不倒翁小箕ノ三品ヲ以テ痘瘡ノ守護神トスト、本草綱目會誌ニ見ヘタリ、

〔松屋筆記九十八〕猩猩といへる異名の者、猩猩々瓶

武家盛衰記十九卷、忠輝卿御船遊ノ條に、越後國名生村ニ、今猩猩々ト云者アリ、渠ハ其浦ノ獵師ニテ庄左衛門ト申ケルガ、酒ヲ好テ飲ケルニ、如何程吞テモ醉タル事ナシ、依之諸人今猩猩々ト異名ヲ呼ブ云々、又猩猩々瓶ノ由來も見ゆ、近來天保六年豊前國宇佐八幡の神領小濱村の産子兄を猩猩壽とよび、弟を猩猩美とよぶ、二人江戸へ來り、猩猩々と號して、いづれも酒を一時に五合許吞む、頭毛赤色にて實に猩猩ともいひつべし、兄は十一歳、弟は八歳也、猩猩々の舞をまひおぼえて見せ物に出、諸家へも召れなどせり、天保十年にも石見竹島近き沖の孤島の獵師の子、頭髮赤くして大酒せる小兒、猩猩々と號て、京大坂邊へ見せ物に出たりといへり、

狒狒

〔書言字考節用集五〕氣形 狒狒ワラヒケモノ 鼻羊山海 野人方輿 人熊說文 狒々鼻羊、人熊並同、人面長臂被髮 迅走、又食、人詳、山海經、本草

〔本草綱目譯義五十一〕狒々 通名也 山ワロウ

人ヲ見テヨク笑、薩摩豊後、其外深山ツヅキ處ニ居ル也、北國ハ飛驒農登邊ノ山ニ居ル也、形人ニ